



「令和6年度 郡山市公立学校教職員研究物展」 開催実績

【趣旨】 郡山市公立学校教職員の実践研究を奨励し、研究意欲を高め児童生徒の学力向上を図るとともに、実践研究の成果を交換し合い相互の研鑽に資する。併せて、広く郡山市民の学校教育に対する理解を深めるための一助とする。

- 会場 ・郡山市立中央公民館（例年は郡山市公会堂で開催。今年度は公会堂改修工事のため。）
- 開催日時 ・審査会：令和7年1月21日（火）、22日（水）（於：郡山市教育研修センター）
・展示会：令和7年1月24日（金）～1月30日（木）
- 出品状況 ・出品数：81点（小学校52点、中学校・義務教育学校29点）
- 審査結果 <特選> 15点 <入選> 15点 <奨励賞> 48点 <推賞> 3点
<<特別賞>> 15点（吾峰会賞4点、退職校長会賞4点、小学校長会長賞4点、中学校長会長賞3点）
- 展示会参加者数 780名（小・中・義務教育学校教員678名、高等学校・教育関係・一般市民102名）

<特選>について（小学校：永盛小学校 中学校：明健中学校、行健第二・明健・小泉小学校）

実践テーマ		主体的・協働的な学びを目指した授業づくり ～1人1台端末を活用した学習指導の工夫～			
学校番号	11	学校名	永盛小学校	職・氏名	校長 三坂 克典
1 実践テーマ設定理由 本校では、1人1台端末を活用した学習指導のあり方について、一昨年度から継続して研究を進めている。昨年度までの実践を通して新たに見えてきた課題は、「タブレット端末を活用するとはどういうことなのか」「タブレット端末を使うだけでは、活用したことにはならないのではないか」ということである。授業づくりを進める上で、「タブレット端末をどう使うか」ということから「タブレット端末を活用した授業はどのような授業か」と「活用すること」に重点を置いた授業づくりの研究を進めていく必要がある。そこで、算数科の学習において、タブレット端末を有効的に活用しながら、個別学習や協働学習の場の充実を図り、「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指した授業改善に取り組んでいきたいと考え、本テーマを設定した。					
2 実践の概略（実践記録の内容） 教育活動に積極的な情報端末の活用を図るために、次の3つの視点で研究を進める。 視点1 学級プラン作成による単元構想・授業構想 視点2 タブレット端末の特性を生かした授業づくりの工夫 視点3 学習したことをおさえる活動の位置付け					
3 成果と今後の実践の工夫 ○算数科の学習段階におけるタブレット端末活用の手立てを具体化し、学級プラン作成により日々の授業改善に取り組んだことで、個別学習や協働学習における有効的な活用を図ることができた。その結果、子どもの主体的な学びや協働的な学びを育み、思考を深めることができた。 ○教師も児童もタブレット端末を使った学習活動がとてもスムーズになり、共有ノートやアップルTVを活用する場面が増え、タブレット端末が授業の必需品になっている。 ●個々の習熟の程度に応じた個別学習の効果的なあり方や、全体での話し合いにおけるタブレット端末を活用した教師のコーディネートの手立てについて、さらに研究を深めていく必要がある。					



<共有ノートと思考ツールによる交流活動の様子>



<「対話力の育成」を4校合同の共通の手立てとしてテーマに迫った>

実践テーマ		4校のテーマ「対話を通して学びを深め・高め合う子どもを目指して」 各校のテーマ 学習場面に応じたICTの効果的な活用と、「深い学び」の実現に向けたまとめの充実 自らつなぐ、みんなでつながる学びを通して深い学びにつながる主体的な3つの対話の工夫を通して互いに学び合う場の充実を通して			
学校番号	3	学校名	明健中学校	職・氏名	校長 近藤 静雄
	4		行健第二小学校		校長 遠藤 淳
	5		明健小学校		校長 高宮 裕
	6		小泉小学校		校長 左雨 貴子
実践の概要 1 実践テーマ設定理由 ICT機器を最大限に活用しながら、さらに豊かな学びを保障し、多様な子どもたちを誰一人取り残さずたく育成する「個別最適な学び」の在り方を追究してきた結果、児童生徒が学習課題に主体的に取り組む、自分なりの考えを導き出せるようになってきた。今年度は、「対話力の育成」を4校共通の手立てとし、児童・生徒が「対話」を通して自分の考えを深め、広げ、新しい考えを共につくり出していく過程を通して、児童・生徒が学びの深まりや高まりを実感できることを目指して、授業実践を積み重ね、本年度のテーマに迫るため研究を進めてきた。					
2 実践の概要 (1) 「対話力の育成」による授業改善・・・「対話力アップ実践事例集」 (2) 小・中一体・連携教育を意識した授業の実践・・・「4校合同授業研究」「交流授業」 (3) 各校児童生徒の実態に基づいた一人一研究授業の実践・・・「校内研究授業」					
3 成果と今後の実践の工夫 ○学習形態を工夫することで、一人ではできなかった児童・生徒も時間を有効に使い、友だちとの比較により間違いに気付いたり、賞賛し合ったり共感し合ったりするなど、効果的な話し合いができた。 ○児童・生徒が様々な対話の方法を知り、それを経験することで、対話スキルの向上が図られ、話し合いが活発になる場面が多く見られた。 ●コミュニケーションということを考えると、ICTはあくまで手立ての1つであり、ICTに頼り過ぎない、人と人の関わりを大切にしたい。 ●教師が話し合いの仕方や視点を与えるなど、発達段階に応じた手立てを講じる必要がある。児童・生徒自身で話し合いを深めていく力を高めていくため、日常から話し合う機会を多く設定したい。					